

佳作

おじいちゃんからの手紙

神奈川県
函領白百合学園小学校 三年

内田 有咲

ふうとうをあけると、その中には手紙と図書カードが入っていました。私が本、大好きなの、知っていました。

ふうとうの中の手紙には、こう書いてありました。

「この度は硬筆のコンクール、入賞おめでとう。そしてジジのための書いてくれてありがとう。おいわいに図書カードをおくりませう。有咲ファンのジジより。」

とても嬉しかったです。お手紙を書いてくれたんだ、私のために。病気なのに書いてくれたんだ。そう思うときゅうにどこからか、あついものがこみあげてくるような、ふしぎな気持ちがありました。

私の大好きなおじいちゃん。

私と同じようにお習字が大好きでつくえのまわりに筆をいっぱいおいて、少し前まではよく字を書いていました。でも今は重いびょう気とたたかっている、筆を持つとつかれるので、このころは書くところを全く見ません。筆もさがったままです。

それでも私が書いた字を見せにいくと、

「上手に書けたね。」

「先生のお手本とくらべてごらん。」

にこにこしながら、やさしく教えてくれます。

なので、今度のコンクールの時、

「おじいちゃんにいっぱいよろこんでもらおう。」

そう思つて私は、一生けん命れん習しました。

「賞じょうをもらつてくるからね。」

よくそくしたのでがんばりました。学校が遠いので一日三分ずつしかできなかったけれど、一まい一まい、心をこめて書きました。本番の作品を書いた時は、力を出しきつたので、あせびつしよりになりました。

だから、入賞のお知らせが来た時は、心がおどるほどうれしかったです。そのお知らせをおじいちゃんに見せると、いつも大きな目もつとまんまるになりました。一生けん命書いてくれてありがとう、そう思つておじいちゃんの手紙をくれたのです。

でもねおじいちゃん、私もおじいちゃんからもらった、たくさんのおプレゼント、思い出があるんだよ。小さい時、すみをするところを見せてくれたね。あのすみのおいは、まだわすれてないよ。私の体の三倍くらいある大きな大きな紙に書いた作品を見せてくれたね。

お習字を二人とも習っているから、習っていないみんながわからないことでも、そうだねとわかつてくれるから、とっても嬉しいよ。

今はおじいちゃん書いていないけれど、びょう気がよくなってきたら、いつしよにお正月書きぞめをしようね。その時まではもつともつと上手になるからね。

「おじいちゃん、私のおじいちゃんになつてくれて、ありがとう。」